

一栄の 異見私見



告白 熊本県の出岡

部で農業を営む友人S氏が訪問してきたが、当地でも多分に現れず鳥獣被害は深刻である。そのような中、S氏の畑では驚いたことにまったく鳥獣被害がないという。S氏の畑に足を運んでみるとラスの鳴き声は聞こえるものの、畑には降りてこない。畑は電柵に囲まれ、多品種少量生産でいろいろの野菜が植えられていたが、鳥獣害の痕跡はない。周りの畑でも同様に電柵が設置されているが、あきらかに鳥獣被害を被って畑は荒れて野菜はまともに生育していない。

S氏が開示してくれたその秘密は、畑それぞれを電柵で囲んでいくが、畑の一部のみは電柵で囲み、そこでは生ごみを発酵させて青いビニールシートをかぶせている。この発酵した生ごみをおとりにし、これをわらで入ってきたインシヤカラス等を電柵に触れさせないように感電させ、電柵を回避するようになっているという。おとりを設け、感電のショックを経験させるようにポイントはあるが、S氏の話の

もう一つの重要なポイントは電柵のメンテナンスにある。電柵の杭が倒れたり、斜めになってほかのもと接触したりすること等によって漏電することは多く、漏電すれば感電のショックはなくなると、鳥獣は容易に侵入してくることになる。このため毎日2、3度

基本に立ち返って 希望をつかむ

は電柵が漏電していかテスターを使ってチェックしているそうだが、逆にいえば、鳥獣被害を防ぐために電柵は全国のあちこちに設置されているが、そのメンテナンスが十分で漏電しているものが多く、鳥獣害対策の効果をあまり発揮してはいないということになる。聞いてみればなるほどという話であり、こうした基本的なところを取り組むだけで、経営改善は可能となり経営効率のアップにもつながる。

がる。ともすれば規模拡大、も次産業化が志向されがちであるが、その前に足元をやるべきことは少なくないことを象徴している。あわせてS氏の柑橘や柿を中心とした果樹園も見学したが、周りにはナタケ等の被害が多く存在しているのに対して、S氏のところにははいかにもよく手入れされた果樹園といった感じで鳥獣も見事であった。S氏は果樹の周りに稲わらを敷いてはいたが、稲わら下ではミミズが繁殖し、アタケはこのミミズを食べて果樹には手を出さないという。ミミズを食べる際に土が掘られて空気の流通がよくなるのが、柑橘にはありがたい薬も多く青々としている。また購入した発酵菌を自ら培養してたい肥を作っているが、そのたい肥を使って栽培した野菜はいずれも生命力が旺盛で、例えばオクラの茎が人間の腕ほどのぶとさもあるのは本当にびっくりさせられた。基本をしっかり踏まえること、そしてこれにさまざまな知恵・工夫を付け加えていくことが大事であり、日本の農業にはまだ希望があることを感じさせられもした。担い手不足にともない構造改善も必要だが、耕地面積が狭く労働集約的であるが故の特徴を生かす付加価値を高めていく途もある。日本農業は奥が深く、途は多様であり、おもしろくもある。(農的社学デザイン研究所代表)